

2022/4/13

(うと Q 世話し 私事：臆病故の危機管理) 書庫版

(添付は故事・杞憂の図)



「危機感の有無が危機回避の有無ともなる」

危機感の度合は想定する範囲の幅 X 実感の深度で決まります。

想定幅が狭く実感も浅薄であった場合、実際には危機が存在するのに「危機がない」と思ってしまう。

実は是が一番危険な状態で大抵の場合実際に危機が起これば全てが後手、後手で中原中也風に申せば

「為すすべもなく日が暮れる」

状態になってしまいます。

以下は自分の話で誠に恐縮なのですが自分は大変な臆病者でちょっとした事にも直ぐにビビってしまう傾向があります。

子供の頃は夜、トイレ行くのに「闇の中に潜んでいるかもしれない幽霊」が怖くて一人行けず必ず母についてきて貰っておりました。

原因は「想像力過多」

そういえば聞こえがいいのですがどちらかというと「妄想癖」に近い様な気がします。

うつ病初期に心理テストを行った結果「想像量が人の3倍位ある」事が分かったのですが、うつ病時期で3倍なら平時だったらいったい何倍だったのか？

3倍位なら「想像力過多」でしょうが5倍とか6倍にでもなっていたとすると是はもう「無いものが見える妄想癖」の類になっていてもおかしくはありません。

実は明日、自分は予約を申し込んでから7か月間待たされた白内障の手術を受けるのですがこの手術が怖くてならないのです。

「白内障の手術なんてもものの10分ですむよ。殆ど失敗もないし病気の内に入らないよ」

と人様からはよく言われるのですが、自分は手術そのものよりも例えば

「手術中に首都圏直下型地震が起きたらどうしよう。揺れで先生の手元が狂ってメスが目

にグサツとか」

とか

「某独裁国が某大国に存在誇示のためにミサイルを発射したらどうしよう。直接某大国本土に打ち込んだらヤバいので取り敢えず相手の出方見に近隣の我が国にテスト的に打ち込んできたらどうしよう」

とか、そんな想像が現実問題として浮上してくるのです。

昔太宰治のエッセーだか何だかで

「電車と駅のホームの隙間等に落ちっこないのに自分にはその幅が大河の様に思われ確実に間に挟まれる妄想」について書いておりましたが将にそんな感じなのです。

自分は物を書くのが大好きなので目が見えなくなったら「死んだも同然」になってしまいます。

なので、

「そうなったらどうしよう？音声入力を学んでおく必要はないか？」

とか

「売上のデータ集計は？外国人スタッフは PC 不如意だから是も音声入力で作るしかないか？」

とドンドン話が発展していってしまいます。

危機に対する想定幅もさりながら実感度の深さがかなり掘込まれている様なのでほぼ現実にかかるものとして織り込んでしまうからです。

「幽霊の正体見えし枯れ尾花」の正体が「枯れ尾花じゃなかったらどうするの？」

が危機管理の出発点なのです。

追記)

我々の歴史はむしろその当時「あり得へん」と思った想定外方向へと流れ続けてきた。

恐らく今後も。

なので、

決して杞憂と疎かにしませぬ様。